

令和8年7月18日（土）

お早うございます。昨日は記録的な豪雨でした。家から出られない方や、家自体に被害がなくても、道路が湖のようで通れない状況だった方、様々です。

今朝、皆さんはスムーズに来られたでしょうか。ここまで来るのに普段の倍以上かかった方もおられたようです。

私はこういう普段とは違う状況を、少し楽しんでしまうところがあります。昨日の午後は大泉にいました。向かう途中、一天にわかに搔き曇りの予報通り、急に黒い雲が広がってきました。普段は画面の中でしか見ないような気象の変化を実際に目の当たりにして、少しワクワクしながら運転していました。

そのうち前がほとんど見えなくなる程の大雨になり、ワイパーも最初は通常で速度で動かしていましたが、一番速い設定にしても前が見えない程でした。これはすごいと感じました。

夕方、帰り道はさらに大変でした。道路はまるで湖でした。水しぶきを両側に上げながら走る状態でした。まるでディズニーのアトラクションのようで、子どもが喜びそうな感覚だなと思いながら運転していました。

家の近くまで来て細い道に入ると、向こうから何台もの車がUターンして戻ってくるのが見えました。それを見て、この先は冠水していて通れないのだろうと判断しました。普段なら5分ほどで通れる道ですが、その日は諦めて私もUターンし、遠回りをすることにしました。

その後、自宅近くのガソリンスタンド付近まで来ると、道路のあちこちに「冠水の危険があります」という赤いブイが水中から出ていました。まるで障害物レースだと思いながら、ぶつからないように蛇行を繰り返して進み、慎重に運転して帰ってきました。普段なかなか経験できない状況を体験できたことは、非常に印象に残りました。

8月は、以前もお話しましたが、電気・水道・ガスの栓を閉じる生活を1か月間体験してみようと考えていました。準備を進め予定表を確認したところ、丸々1か月間赤城山に籠ることは難しいと分かったので予定を変更し、15日間になりました。その15日間は、日常使っている電気・水道・ガスを使わない生活を実際に体験する予定です。

まず、水についてです。防災について調べると、水は1人1日1ℓのペットボトル3本分程度が必要と言われています。本当にそれだけ必要なのか、自分で確かめてみたいと思っています。15日間で実際に何本のペットボトルを飲むことになるのか、データを取る予定です。

次に食事です。普段であれば赤城山にいても炊飯器のスイッチを押せばご飯が炊けますが、今回は電気を使いません。調べてみると、電気を使わずに食べられる非常食が数多く販売されていました。お湯や水を入れるだけで食べられるご飯もありますので、実際に試してみようと思っています。

非常時に、電気・ガス・水道が使えない状況で、どのような食事ができるのか、何を食べたのか、その結果も記録してみたいと考えています。

水道についてですが、赤城山では管理組合が川の水を浄化し、各家庭へ供給しているとの事です。生活用水として水がどのくらい必要なのか、どのように使うのがよいのかも確認してみたいと思います。

気になるのがトイレです。東京のビジネスホテルなどに宿泊すると、エレベーター内や客室内に、非常用の飲料水や断水時にはこの水をトイレでお使い下さいと書かれた水が置かれていることがあります。

赤城山の家トイレは、電気を使わなくても、一定量の水を直接流し込めば排水できる仕組みになっているようですが、実際にどれくらいの水があれば1回分を流せるのかも実験してみようと思っています。非常時に必要となる水の量を実際に測定し、データとして残しておきたいと思っています。

自分で体験しながら具体的なデータを集められることは、興味深く、今から楽しみにしています。

そんなことを考えながら、夕方家で過ごしていたところ、地域全体が大雨の影響を受ける状況になりました。最初はスマートフォンから突然、大きな警報音が鳴り響き、何事かと驚きました。

画面を見ると、太田市からのお知らせと表示され、警戒情報が発令されていました。内容を確認すると、牛沢地域に関する情報でしたので、この辺りは対象ではないのかなと思いながら車を走らせていましたが、その後はお話したように、非日常の世界が広がっていました。

私は、こうした非日常の出来事に触れると、不思議とワクワクしてしまいます。普段とは違う経験を、実際に体験できる機会はなかなかありません。警戒情報についても、太田市のどの部署が発信しているのかまで表示されていました。

今朝、どうなっているだろうと思いながら外へ出ました。昨夜あれだけ雨が降ったので、庭も湖のように水浸しになっているのではないかと、少し興味を持って見たのですが、庭の水はすっかり引いていました。

皆さんも今回普段とは全く違う、非日常的な状況を体験されたことと思います。大きな道路を走っていると、この先は危険という目印として、赤い杭のようなものが道路のあちこちに設置されているのを見かけました。昨日だけでも4か所ほど見ましたので、それだけ冠水の危険な場所が多かったのだと思います。

冠水による被害もありました。聞いた話では家庭菜園10年間で2回目の冠水だったそうです。農作物が水に浸かってしまうと、大きな被害になります。幸い半分は助かったそうですが、丹精込めて育てた農作物ですので非常に残念な出来事です。

ここで考えさせられるのは、同じ出来事でも、人によって受け止め方が違うということです。「半分为駄目になってしまった」と考える人もいれば、「半分は無事だった、よかった」と考える人もいます。同じ状況であっても、どちらに目を向けるかによって気持ちは大きく変わります。

以前、アメリカの大学で、このような物事の受け止め方について研究しているという話を聞いたことがあります。同じ出来事を経験しても、物事を前向きに捉える人と、悲観的に捉える人では、健康状態や寿命に違いが見られるという研究です。具体的に寿命が何年違うのかまでは発表されていませんが、物事を前向きに受け止める人の方が、寿命が長い傾向があるという内容でした。

目の前の出来事をマイナスと捉えるのか、この中にも良い面があるとプラスに考えるのか。受け止め方は、人生にも良い影響を与えるのだと思います。今回のような非日常の出来事だからこそ、物事の見方や考え方について改めて考える機会になったのだと思います。

今回は論語を5つ選びました。ご一緒に味わいながら読んで戴くと、自然に合点がいくものばかりです。それでは、ご一緒に素読をお願い致します。

(全員で素読)

有難うございます。ご自身でイメージを膨らませながら、解説をお聞き戴ければ幸いです。

① ^{し いわ}子曰く、^{これ い か}之を如何にせん、^{これ い か}之を如何にせんとい^いわざる者は、^{もの}吾^{われ}之^{これ}を如何と^{い かん}

もすること末^なきのみ。(衛霊公第十五・15)

この章句は、現代の AI に置き換えて考えると、とても分かりやすくなります。AI をどう活用したらよいか、AI とどう向き合えばよいか、そんなふうに真剣に考え、悩む人が増えています。

一方で、AI とは何なのか分からないし、どう使えばいいのか分からないと思いつつも、何も考えようとししない人もいます。そこで、この言葉を現代風に解釈してみましょう。

「吾、之を如何ともすること末^なきのみ。」

現代の AI に置き換えて考えてみましょう。ここでいう「吾」を AI の専門家だと考えると、AI をどうしたらよいかと自ら考えない人には、専門家も適切な助言はできない、ということになります。まず自分で考え、学ぼうとする姿勢があってこそ、人は力を貸してくれるのです。

私にも似た経験があります。20 年ほど前、パソコンが普及し始めた頃、今さら使い方を聞けないという同年代の方が大勢いました。私自身もパソコンが苦手でしたが、同年代の人達と一緒に少しずつ練習し、片手でなら何とかキーボードを打てるくらいになりました。

どうしたらよいか自ら考え、学ぼうとする人には、必ず教えてくれる人が現れます。考えようとししない人には、どれほど周りが助けようとしても、本当の意味で力になることはできません。

孔子が伝えたかったことも、同じではないでしょうか。孔子は、論語をどう学べばよいのか、どういう意味なのか、なぜそう考えるのか、自ら問いを持って学ぼうとししない弟子には、教え導くことは出来ないと語っています。

当時の弟子たちにとって、孔子は現代の AI のような存在だったのかもしれませんが。その知恵も、自分から学ぼうとする人にこそ生かされるということを、この章句は教えてくれています。

②子^し曰^{いわ}く、君子は言^{くん}を以^して人^{げん}を挙^{もつ}げず。人^{ひと}を以^あて言^{ひと}を廢^{もつ}てず。(衛霊公第十五・22)

この言葉は、人を評価するときの大切な心得を教えています。

「言を以て人を挙げず」とは、口先だけで人を評価してはいけないということです。

例えば会社で新しいプロジェクトを任せる人を選ぶとします。「私に任せてください。出来ます」と言う人がいたとしても、その言葉だけで任せてはいけません。日頃の仕事ぶりや行動を見て、本当に任せられる人かどうかを判断することが大切です。

これは家庭でも同じです。お子さんが出来ると言ったからといって、その言葉だけを信じるのではなく、普段の様子を見て判断することが必要です。

一方、「人を以て言を廃てず」とは、人をよく観察していれば発言だけで人を評価しないということです。普段から誠実に努力している人が、私には出来ませんと謙遜していても、日頃の姿を見て、この人なら大丈夫だと思えるのであれば、任せてみるべきです。

仕事でも同じです。私は大事な業務を任せる人を選ぶとき、出来ますという言葉だけでは決めません。これまでの仕事ぶりや信頼関係を見て判断します。

つまり孔子は、人は言葉や肩書きだけで判断してはいけない。普段の行動や実績をよく見て、その人を評価しなさいと教えているのです。偏見に囚われず、言葉と人を切り離して、それぞれを公正に評価すべきであるという、物事の本質を見抜くための大切な教えです。

③子^し曰^{いわ}く、巧言^{こうげん}は徳^{とく}を乱^{みだ}る。小^{しょう}を忍^{しの}びざれば、則^{すなわ}ち大謀^{たいぼう}を乱^{みだ}る。（衛霊公第十五・26）

「巧言は徳を乱る」

口先だけが上手な人は、やがて人としての徳を損ない、周りとの信頼関係にも問題が生じやすいという意味です。

話が上手だからといって、その人をすぐに信用するのではなく、普段の行動や人柄を見ることが大切です。仕事でも人間関係でも、口先だけで判断すると、後になって思わぬ問題が起こることがあります。

「小を忍びざれば、則ち大謀を乱る」

小さなことに腹を立てると、大きな計画や目的を成し遂げることはできないという教えです。

私自身も、結構頭に血が上ることがありますが、自分もまだまだなのだと思います。

大きな仕事やプロジェクトを進めるときほど、小さな失敗や細かなことに捉われすぎないことが大切です。欠点ばかりを見るのではなく、良いところに目を向ける心構えが、大きな成果につながると孔子は教えています。

④子^し曰^{いわ}く、衆^{しゅう}之^{これ}を惡^{にく}むも必^{かなら}ず察^{さつ}し、衆^{しゅう}之^{これ}を好^{よみ}するも必^{かなら}ず察^{さつ}す。（衛靈公第十五・27）

これは、大衆が皆嫌っても鵜呑みにせず、よく現実を調べて自分の判断力で判断しなさいという意味です。

この言葉は、現在の国会や政治にも当てはめて考えることができます。「衆」は、大衆や国民全体を指します。多くの国民が増税は困る、消費税を減税してほしい、と訴えているのであれば、政治家は単にその声を聞くだけではなく、その背景にある国民の生活振りや経済状況をしっかりと見極める必要があります。これが「必ず察し」の意味です。

高市早苗さんは内閣総理大臣ですので、国民がなぜ減税を求めているのかを、歴史や過去の事例も踏まえて判断することが求められるでしょう。

国が衰退し破産しそうな時には、最も効果的な政策は減税であると何度も申し上げてきました。

木内信胤先生も、国が乱れ、滅びそうな時には減税が最も良いと説いています。渡部昇一さんも、ローマ帝国の歴史を例に挙げ、税負担が重くなりすぎると国は消滅していくと述べています。

歴史を振り返ると、国民が増税を嫌う背景には、生活を立て直すために減税してほしいという切実な思いがあります。その声を正しく読み取り、政策に反映させることが政治の役割ではないでしょうか。

日本の歴史にも、その考え方を示す有名な逸話があります。仁徳天皇は、高い場所から民家を眺め、かまどの煙が上がっていないことから、人々が十分な食事もないほど困窮していると判断し、税を免除したと伝えられています。人々の暮らしが回復し、かまどの煙が立ち上るようになってから、改めて税を課したとされています。

もし高市早苗さんが真に国の将来を考える総理大臣であるならば、消費税だけでなく、税負担全体を思い切って引き下げることを選択肢として検討すべきだと思います。そのような決断ができれば、後世に名を残す政治家として評価される可能性もあるでしょう。

目先の政権運営を優先するのか、それとも歴史に残る政治を目指すのか。その姿勢が問われる場面だと思います。

「衆これを好むも必ず察す」

大衆が皆良いと言っても、良く調べた上で事実を確認して判断しなさいという教えです。

この良い例として、朝三暮四の故事があります。猿に木の実を与えていた主人が、「朝は三つ、夜は四つ」と言うと猿は不満を示しました。そこで主人は、「それなら朝は四つに増やしてあげよう」と大きな声で言いました。猿たちは大喜びし、拍手喝采。しかし主人は、その後小さな声で、その代わり夜は三つに減らすと付け加えました。結局、一日に与える木の実の数は変わっていないにもかかわらず、猿たちは朝増やすという言葉だけを聞いて喜んだのです。

この話は、大衆心理をよく表しています。孔子は、多くの人が賛成しているときほど危ない、周りの声に流されることなく自分自身の判断力を養い、物事の本質を見極めることが大切だと教えています。

⑤子曰く、君子はし いわ小知せしむべからず、くん し大受せしむべし。しょう ち小人はたい じゅ大受せしむべからず、しょう じん小知せしむべし。たい じゅ（衛霊公第十五・33）

君子は細かな仕事には向いていないが、大きな仕事は出来ます。一方、小人は細かな仕事はこなせても、大きな仕事を任せることは出来ないという意味です。

前に学んだ内容とも通じる教えです。君子を目指したいと思う方は、よくお聞き下さい。

君子とは、細々とした仕事よりも、世の中全体をどうすべきかの大きな視点で物事を考え、実行することに力を発揮する人物です。

現代に置き換えて考えてみましょう。最近、ニデックの問題が大きく報じられました。

創業者の永守重信さんは一時期、稲盛和夫さんを彷彿とさせる経営者だとメディアで高く評価されていました。しかし、粉飾決算に関する問題が報じられ、会社全体を巻き込む大きな問題として取り上げられるようになりました。実現が難しいほど高い予算目標を設定し、その達成を強く求める経営姿勢も指摘されています。

このような問題が表面化すると、それまで築き上げてきた評価は一気に崩れてしまいます。

また、KDDI が不正会計という大きな見出しを見かけました。KDDI に何があったのだらうと思って記事を読んでも、内容は KDDI 本体ではなく、子会社の架空取引に関するものでした。見出しだけを見ると、あたかも KDDI 全体に問題があったかのような印象を受けます。見出しだけで判断してはいけないと改めて感じました。粉飾決算については、後ほど改めてお話したいと思います。

自分では君子を目指し、正しいことをしているつもりでも、どこかで一度道を踏み外してしまえば、それまで積み重ねてきた努力や信用は一気に崩れてしまいます。

君子たらんと欲すれば、生涯を通じて誠実な姿勢を貫くことが大切なのです。

以上で論語の解説が終了しましたので、本日のテーマについてお話してまいります。

本日皆さんには、レジュメと共に資料をお配りしています。戦争によるインフレーションの激化、金融庁による名寄せ制度の整備、ネバダレポート等を取り上げていますので、その資料に沿って内容を解説してまいります。

今回のテーマは「歴史は繰り返す」です。当時の時代背景としては物資不足がありました。今後同じような状況が起こる可能性があることから、歴史は繰り返すという視点で見ていきたいと思います。

資料①に配給制について書かれています。昭和 17 年から衣料品の切符制が始まりました。必要なものでも自由に購入できず、配給によって手に入れる仕組みになりました。

資料を見ると、砂糖、味噌、醤油、塩、肉、卵といった食料品から魚や野菜などの生鮮食品も全て配給制となっていたことが分かります。当時は食べ物だけでなく、衣料品など生活に必要なあらゆる物資が不足し、配給制へと移行していきしました。

深刻な状況については資料①後半、ある主婦の日記が掲載されています。

その主婦は新宿のデパート地下食品売り場で、天ぷらを揚げている様子を見つけ、今日は天ぷらが食べられると喜んで列に並びました。ようやく購入して家に持ち帰り、家族で分け合って食べようとしたところ、口に入れた瞬間、腐っていることに気づきました。悪臭がして、とても食べられる状態ではなかったそうです。

このような体験が主婦の日記として『日本の歴史シリーズ第 21 巻 太平洋戦争』に掲載されています。当時は、それほどまでに食料事情が厳しかったことが伺えます。

こうした歴史を踏まえると、今後も食料品や衣料品等が配給制になる事態が起こる可能性について考えておく必要があります。一方、そうした困難な時代であっても、時代の変化を逆手に取り、大きく成長していった企業もありました。

次の資料②にある「金融非常措置」については、『戦後インフレーション—昭和 20 年代の日本経済—』という書籍から引用しています。後から当時を振り返ってまとめられた内容ですが、経緯がよく整理されている資料だと思いました。

私がこの資料に注目したのは、金融政策に関する記述の中に木内信胤先生が出てきたからです。この本に書かれている内容をいくつか紹介します。

緊急金融措置令が決定された背景には、食料の買い占めが深刻な問題となっていました。資金力のある人々が食料を大量に買い集めて隠匿したため、市場から食料品が姿を消し、多くの人が必要な食料を手に入れられなくなっていました。そのため、隠匿された物資を市場に放出させるにはどうすればよいかが大きな課題となりました。

この問題については、福田赳夫、池田勇人、木内信胤、大蔵省の事務次官など、数名が一室に集まり、集中的に議論を重ねました。その議論をもとに一気に制度設計が進められ、最終的に法律が制定されています。

後年、福田赳夫が当時の大蔵大臣であった渋沢敬三に質問し、それに渋沢が答える形で回想した記録が残されています。その中には木内信胤先生についての話も含まれており、大蔵省の戦後財政資料に収録されていた内容が、この本にも引用されています。

当初の構想では、まず旧紙幣の流通を停止し、預金封鎖を実施したうえで、新しい紙幣へ切り替えることが考えられていました。食料などを大量に隠匿していた人々は、旧紙幣では食料品や医療品などを購入出来なくなります。従来 of 貨幣を社会から一旦消すことで、滞っていた流通や物流を再び動かそうという発想だったと説明されています。

木内信胤先生は金融政策の観点からこの措置を考えていましたが、渋沢敬三大蔵大臣は、資産家から財産税を徴収することに意欲を示していました。実際、財産税の最高税率は 90% という極めて高いものでした。

福田赳夫さんが渋沢敬三さんに財産税の徴収について質問した際、金融非常措置は、財産税を徴収する為の手段として実施したと説明したようで、それぞれの思惑は異なっていましたが、金融封鎖を行い、まず貨幣の流通を止める点では共

通の認識を持っていました。その共通の方針を出発点として、それぞれの目的に応じた政策や法律が次々と整備されていったと考えられます。

当時の状況で少し引っ掛かりを覚えた点として、資料②の最後に記載した内容があります。金融封鎖が行われると、原則として預金を自由に引き出すことはできません。しかし、木村禧八郎著『インフレーションの研究』には、当時は預金額の1、2割程度の手数料を支払えば、預金を引き出せることが一般の常識になっていたと記されています。こうした実態は、当時を知る人でなければ分かりません。

また、『百年史』第5巻には、租税は封鎖預金に基づいて振り出される小切手で納入することを認められていたことも記されています。その小切手で納税や、商品を購入したりすることも可能でした。

こうしたことから、金融封鎖には実際様々な抜け道が存在していたと考えられます。

終戦直後には、制度の隙間や経済環境の変化を巧みに利用して、短期間で大きな財産を築いた「成金」と呼ばれる人々が現れました。当時の資産形成には、こうした制度の活用も少なからず影響していたのではないかと思います。

歴史を振り返ると、大きな社会的・経済的变化が起こるたびに、その状況を利用して新たな富裕層が生まれる可能性がありました。再び大きな変化が起これば、新たに「令和成金」と呼ばれる人々が現れるかもしれません。

次に、名寄せの整備についてです。現在ではマイナンバーカードが広く普及していますが、その源流の一つとして、この名寄せの考え方があると考えられます。

資料③は、添島隆彦著『恐慌前夜』から引用したものです。この中では、特に資産家や経営者層の個人資産について、様々な情報をコンピューターで一元的に管理する考え方が紹介されています。名寄せを行うことは監督官庁として当然の行為である、という趣旨の説明がなされています。

ペイオフ解禁の際にも、監督官庁は名寄せを進める方針を示していましたが、メディアで大きく報道されることはありませんでした。その後、マイナンバーカードが普及したことで、個人の所得や行政手続に関する情報が一元的に管理される仕組みが整備されてきました。

私はこうした流れが広く知られる以前から、マイナンバーカードの取得が法律で義務付けられない限り取得しないと公言してきました。それについて問題が起きたことはありませんが、カードの取得を勧める案内を多く目にするようになり

ました。

医療機関でもマイナンバーカードの利用を勧められる機会が本当に増えました。政府が税金を取りたいが為にありとあらゆる手段を使ってマイナンバーカードを促進させていると思っていますので、私は最後まで作るつもりはありません。

75 歳以上の後期高齢者については、マイナンバーカード所持の有無に関わらず資格確認書が送られてくる仕組みになっているようです。医療費の自己負担割合については、所得に応じて 3 割、2 割、1 割と区分されるなど、制度はこれまで何度も見直されてきました。高齢者医療制度も時代とともに税負担が増える仕組みに変化していることが分かります。

資料④のネバダレポートについては、何度も申し上げてきましたので、ここでは改めて要点を確認しておきます。以下抜粋をご覧ください。

〈五十嵐文彦氏が示したレポートの内容〉

- ①公務員の総数、給料は 30%以上カット。及びボーナスは例外なくすべてカット。
- ②公務員の退職金は一切認めない、100%カット。
- ③年金は一律 30%カット。
- ④国債の利払いは 5 年から 10 年間停止。
- ⑤消費税を 20%に引き上げる。
- ⑥課税最低限を引き下げ、年収 100 万円以上から徴税を行う。
- ⑦資産税を導入し、不動産に対しては公示価格の 5%を課税。債券、社債については 5%から 15%課税。
- ⑧預金については一律ペイオフを実施し、第 2 段階として、預金を 30%から 40%カットする。

（「日本国はいくら借金できるのか？ 国債破綻ドミノ」川北隆雄著）

ネバダレポートが公に取り上げられたのは、今から約 24 年前のことです。資料によれば、2002 年に衆議院予算委員会で五十嵐氏がこのレポートについて言及したことが紹介されています。かなり以前から知られていた資料ですが、24 年前のもののですが、内容は現在でも十分通用すると思います。

仮に将来、日本が深刻な財政危機や経済危機に直面した場合には、ネバダレポ

ートで示されたような政策が議論の対象となる可能性があります。その際実施される措置は、より大きな数字になる可能性が高いでしょう。

資料⑤に移ります。この資料を改めて読み返し、中曽根康弘氏が総理大臣退任後にどのような認識を示していたのかを確認してみました。

特に印象に残ったのは、2000年に発表された資料です。今から約26年前の時点で、中曽根さんは「日本の財政経済の現実はまだに死の淵に臨んでいる」と述べています。また、日本政府の債務残高がGDPに対してどの程度の規模に達しているかについても指摘しており、このような議論は現在では一般的ですが、26年前の時点で既にこうした問題意識を示していたことは注目に値します。

当時、「死の淵に臨んでいる」という表現は、まだ危機の直前にあり、このままでは深刻な事態に陥る可能性がある為、十分に注意しなければならないという警鐘だったのでしょうか。

現在、当時よりも危機的状況がさらに進行しています。当時は淵に立っている状態だったのに対し、今は完全に淵の中に入り、水位が徐々に上がってきて辛うじて息ができています。

こうした状況をなぜメディアで十分に伝えないのかと疑問に感じることがありますが、報道はされても異なる表現で伝えられる為、危機の深刻さが十分に伝わっていないと思います。

中曽根さんは、日本が戦後の激しいインフレーションを収束させるためにドッジ・ラインによる政策を進めた一方で、厳しい経済不況を経験したことにも触れています。その後、日本経済が回復へ向かった大きな要因として、朝鮮戦争による特需が日本経済の再建を後押しし、日本が再び活力を取り戻す契機となった認識が示されています。

世界の事例を見ても、1929年のアメリカの経済恐慌の混乱を最終的に収束させたのは、皮肉にも第二次世界大戦だったと中曽根康弘さんは総括しています。

中曽根さんは、基本的には陳情を受けない人物として知られていました。一方、田中角栄さんは、陳情を何でも受ける姿勢でした。この二人を比較すると、非常に対照的で興味深いと思います。

福田赳夫さんは経済官僚出身で、お金の流れを適切に管理し、表に出しにくい資金であっても合法的な形で処理・活用することに長けていたと評価されています。そのため、福田さんは法的な問題に発展することはありませんでした。

田中角栄さんは幅広く陳情を受け付けていたので、陳情をする側も様々な働きかけを行い、中には金銭が絡むケースもあったといわれています。田中角栄さん

は資金を合法的に処理する手法が十分ではなく、さらにアメリカから狙われたこともあって、結果、事件に発展し、逮捕・起訴されることになりました。

最後に、資料⑥「未来の年表」について気になっている事をお話します。未来の話といっても、まずは最近の出来事を踏まえながら、これから社会がどのように変化していくのかという視点でお話したいと思います。

先ほど、『論語』の話の中で、「これからはAIを使えないといけない時代になる」ということをお伝えしました。実際に、AIをどのように使いこなしていくかについては、皆さんも関心を持っているのではないのでしょうか。

先日、私は大井町トラックスという新しくオープンした施設へ行ってきました。JRが自社の土地を活用し、大規模な複合施設へと再開発を進めています。実際に訪れてみると、サウナや大きな外資系ホテルがあり、飲食店も従来とは大きく異なっていて、まるで海外に来たような雰囲気もありました。

施設内では、様々な場面で自動化やロボット技術が取り入れられていました。ロボットは既に特別な存在ではなく、私たちの身近な場所で当たり前に見かける時代になっていると、改めて感じた次第です。

1週間ほど前の日経新聞に興味深い記事が掲載されていました。三菱自動車が京都の工場の人型ロボットを年間生産する計画を進めており、ロボットの量産時代が始まるという内容でした。

記事では、トヨタや日産もロボットを製造できる技術や生産能力を持っている為、本格的に参入する可能性があることや、ホンダもこれまで培ってきた手や指を精密に動かす技術を生かしてロボット開発を進めることが紹介されていました。

自動車メーカーは車だけでなく、ロボットも大量生産する時代に入ろうとしているのです。今後、ロボットは私たちの社会にさらに増えていくでしょう。

将来の予測として、数十年後には、人間が現在行っている仕事の約6割がロボットに置き換わるという内容が紹介されていました。人間が人間にしかできない仕事として残るのは4割程度になるという予測です。確か20年後を想定した内容だったと思いますが、私はその変化はもっと早く訪れるのではないかと感じています。

先日、高輪ゲートウェイ駅にも立ち寄りました。数年前、この駅構内に無人コンビニができたと聞き、すぐに見に行ったことがあります。当時は確かに無人で営業していましたが、利用方法がまだ十分に浸透していなかったもので、店舗外に係員が立ち、操作方法を説明していました。

今回改めて訪れてみると、無人コンビニは残っていましたが、人はあまり寄り付いていませんでした。高輪ゲートウェイ駅周辺ではニューマン高輪を中心とした大規模な複合施設の整備が進み、街そのものが大きく変わっていました。

施設内を歩いていると、一見すると小型の箱のような乗り物が置かれていました。しばらく見ていると、若い女性がその上に乗り、操作をすると静かに目的地へ向かって動き始めました。

ちょうど近くに係員がいたので、どうやって操作するのか尋ねると、「とても簡単です。乗って少し触れるだけで動きます」と説明してくれました。実際に試してみると、その通りスムーズに走り始めました。これも広い意味では、新しいモビリティの一つだと感じました。

コンビニもあり方そのものが大きく変わってきていると感じました。例えばローソンでは、店舗内にクレーンゲームを設置する取り組みを始めていると報道されています。また、店頭で野菜を数多く並べて販売している店舗も見かけ、八百屋のような役割も果たしていると感じました。

セブンイレブンでも、野菜を積極的に販売している店舗があります。実際に店員の方へ話を聞くと、もともと八百屋を営んでおり、その仕入れルートがあるため、コンビニを経営しながら野菜も販売していると話していました。地域や店舗の特色を生かした営業が行われているのです。

さらに、セブンイレブンではパウダースペースを備えた店舗があり、現在はまだ3店舗ほどですが、今後は順次拡大していく計画だそうです。

一方、ファミリーマートではアパレル商品の販売にも力を入れています。店舗内に試着室を設け、実際に試着してから購入できる店舗づくりを進めているとの事です。

このような取り組みが進んでいる背景には、コンビニ業界全体の変化があります。昨年は業界全体の売上が減少したといわれています。これまで成長を続けてきたコンビニ業界ですが、売上が伸び悩むようになったことで、各社とも新しい業態・サービスへの挑戦を積極的に進めているのでしょう。

こうした動きを見ていると、企業は『未来の年表』で予測されていた変化よりも早い段階から次々と手を打ち始めているように感じます。『未来の年表』の多くは10年ほど前に出版されたものですが、その間にも社会や消費者のニーズは想像以上のスピードで変化しており、その変化に合わせて企業も進化を続けているのだと実感しています。

〈恒例の質問〉

最後に恒例の質問を致します。今年に入って半年と少し経ちました。

- 今年良い日が続いておられる方
- 嘘はつかれなかったし、嘘もついていないという方
- 有難うと言いつけているし、有難うと言われ続けている方
- 身体の手入りをよくやっていると思う方
- 自分磨きをよくやっていると思う方
- 昨晚寝るとき、満足感を持って寝た方

時間になりましたので、本日は終了致します。有難う御座居ました。